

早大教育 ○伊藤秀三郎  
奥村 勝美

1. 酒精は細胞の働きを低下させるし、中枢神経に対してもマヒ的に作用する。今、不摂生に飲酒すると不安定な生活行動を招き、思わぬ事故を起す率も自然と増える。そこで節酒、極端に云えば禁酒が奨励される。

一方、単寧酸は腸の収斂薬であるが、単純に服用したのではその効能を発揮する事は出来ない。なぜならば腸に行くまでに消失する。

しかし作用は、細胞やその分泌物の蛋白質と結合し、組織を保護するのである。

そこで、演者等は細胞に対する酒精の作用を、単寧酸によって弱められるかどうか検討した。

## 2. 実験動物 蛙

筋肉：酒精単寧酸混合液に浸し、その消滅時間を計測

心臓：八木式灌流器で拍動させ、その灌流液中に酒精単寧酸混合液を入れ、その拍動曲線の変化を観察

3. 筋肉に対し、酒精にしる、単寧酸にしる、作用する事は、機能の消滅時間から明らか、尚後者が前者より作用は著るしくない。しかしながら回復の点では恐らく逆である。

心臓に対しても、ほぼ筋肉の場合と同様である。

かくて、単寧酸は、酒精のマヒ作用を減少させる。

『飲酒後の喫茶の有効性は、恐らく上記の理由によるものと思考する』